

# 能登被災地に心を寄せて

## 「共に支援活動を」と意気投合

宗派支援センター 美容師グループと共同で炊き出し

宗派の能登半島地震支援センター（金沢市・金沢別院内）は2月14日、石川県能登町の能都中学校と白丸地区の公民館で炊き出しを行った。全国的美容院経営者や美容師でつくるNPO法人ウディチキン（本部＝大阪市）と共同で実施。東京など各地から駆けつけた美容師ら8人とセンタースタッフの11人で訪問し、チゲ鍋と豚汁それぞれ

200食を被災した人らに提供した（写真）。

炊き出しは、センターのスタッフが金沢市で美容院を営む松村謙助さん(47)と同市の飲食店でたまたま隣の席に座ったのがきっかけ。本願寺派が支援活動を行っていることを知った松村さんはその場で協力を申し出て、2月5日に七尾市・浄尊寺の片付けのボランティアに参加。「次は美容師の仲間とお手伝いがしたい」とセンターに相談し、炊き出しを行うことになった。

能都中学校の体育館には町民ら78人が避難しており(当時)、松村さんらが「温まってください」と声をかけながら器を手渡すと、「ありがとう」と笑顔が広がった。また、白丸公民館の神田幸夫館長(69)は「公民館には調理する場所がないので温かい食べ物の炊き出しは本当にありがたい。私も本願寺派寺院の門徒。お寺さんが炊き出しにき



てください、うれしい」と話した。

松村さんは「皆さんの笑顔に私たちが元気をいただけた。今度は無料ヘアカットなどで支援活動ができれば」と話していた。

## 北海道から「ご恩送り」

胆振東部地震で被災した僧侶らがマッサージカフェ

2月20日には、北海道教区の僧侶4人と旭川市のマッサージ師3人が石川県穴水町の光琳寺（長谷川速磨住職）で「マッサージカフェ」を開いた。

ボランティアに加わったむかわ町・法城寺の舛田那由他住職(43)は、2018年の北海道胆振東部地

震で寺の鐘樓が倒壊するなど大きな被害を受けた。胆振地震の後、今回同行したマッサージ師らを寺に招いて施術ボランティアを行った経験があり、今回は能登半島地震で困難な生活を続けている人たちに疲れを癒やしてもらいたいと、友人の僧侶らを介して光琳寺を訪ねた。

光琳寺は発災直後から2月10日まで同寺の保育所を自主避難所として開放、この日は共に避難生活を送った人ら14人が集まった。園舎の一角に施術コーナーを設け、マッサージを提供するかたわら（写真右）、僧侶らは北海道から持参した名菓などを振る舞いながら、「自宅に戻られて何か不安なことは」「今どのようなことに困っていますか」などと優しく言葉をかけていた（同左）。



カフェコーナーで舛田住職が「たくさんのご支援をいただいて私たちは復興することができた。今回は『ご恩送り』のために来させていただいた」と話すと、穴水町の80代男性は「また北海道から来ていただき、町がどうなっているかをぜひ見てほしい。私もその時まで頑張る」と応じた。長谷川住職は「集まった人たちは北海道の方たちの優しさに触れ、身も心も癒やされたと思う。本当に温かい絆をいただいた」と感謝していた。



## 震災支援のご恩報いる番

熊本少年連盟が復興支援バザー

熊本教区少年連盟は2月21、26、27日の3日間、熊本別院（熊本市中央区）で能登復興支援バザーを開いた。

教区内の寺院や門信徒に協力を呼びかけて品物を募り、食器や日用品などのほか、県北西部の和水町産のもち米で作った桜もちや、人吉・球磨地方の味噌や漬物などを販売（写真）。売り上げは、宗派のたすけあ

い運動募金や復興支援を行う団体に全額寄付した。

同連盟の廣海亮介委員長（36、熊本市南区・正福寺住職）は「自坊も熊本地震(2016年)で本堂の梁がひび割れるなど半壊した。その中で有り難かったのが、全国の皆様のご支援。今度は私たちがご恩に報いる番と思い、バザーを企画した。私たちにできることは多くないかもしれないが、少しでも能登の皆さんのお力になれば」と復興支援への思いを話した。

